

周防大島中学校 研修通信 vol.2

全学調の結果より

盆休みも終わり、2学期の開始まで2週間となりました。今回の研修通信では、8月上旬に公表された全学調の結果より、授業づくりについて考えてみたいと思います。

山口県の全体の結果として県教委が発表している資料（令和7年度全国学力・学習状況調査結果について）からの抜粋となりますが、今回の全体の傾向としては、以下のことが挙げられています。

国語は全国平均を上回り、数学及び理科は全国平均と同程度であった。中学国語は、全国と比べ、正答数が8～10問（全14問）の生徒の割合が高い。中学数学は、全校と比べ、正答数が5～6問（全15問）の割合が高く、正答数が12～15問の生徒の割合が低い。中学校理科では、IRTバンドは、全国と同様の分布状況である。

この資料では、それぞれの科目の成果と課題についてまとめられていますが、中学校国語について解説していきたいと思います。中学校国語の課題については、「文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えること」について、記述式で答えることに課題が見られる。」とあります。この問題については、全校平均・県平均ともに正答率が17.1%と低い数値となっています。周防大島中学校の正答率は18.6%で、この問題については、1.6ポイント上回っています。問題と模範解答は以下の通りです。

島崎藤村「二人の兄弟」 この文章は、「一 榎木の実」「二 釣の話」で構成されています。

□で囲まれた部分には、兄弟が目的を達成できなかった場面のあとに続く話が書かれています。あとに続く話は、「一 榎木の実」にはありますが、「二 釣の話」にはありません。このような展開になっていることは「二人の兄弟」という物語においてどのような効果があると考えますか。あなたの考えとその理由を書きなさい。理由をかく際には、物語の内容を取り上げて書きなさい。

模範解答

読者の意表を突く効果がある。なぜなら、「一 榎木の実」には、失敗した兄弟が、お爺さんのおかげで成功する場面が書かれているため、「二 釣の話」も同じような展開になると予想して読み進める読者が多いと思うからだ。

この問題は、近代文学で有名な島崎藤村の平易な文章の読解問題ですが、中学3年生といえども、作者の表現意図を考え、本文中の根拠を提示しながら理由を言語化するのは大変難しかったのではないかと思います。この文章は、「一 榎木の実」「二 釣の話」ともにせっかちな弟と悠長な兄が出てきます。二人ともちょうどよくすることができないので榎木の実を収穫するのも釣りをするのも失敗してしまいますが、「一 榎木の実」の話では、奉公のおじいさんがアドバイスをしてくれてめでたしめでたしとなります。しかし、「二 釣の話」では、失敗したところで完結しており、読者は「つづきは？」となります。

問題では、なぜ、続きが書かれていないかを考えることになりますが、自分も限られた時間の中で、模範解答と同じような解答ができる自信はありません。

では、この問題が解けるようになるには文章を的確に読み取った上で作者の表現意図まで探り、根拠を明らかにしながら、自分の考えを主張する表現力が必要なわけですが、国語科指導の研究者に鶴田清司さんという方がいらっしゃいますが、この方が提唱する「根拠・理由・主張の3点セット」が有効ではないかと考えます。この3点セットにおける「根拠」とは「証拠資料」のことで、「理由」とは、その根拠資料がなぜ主張を支えることになるのか、どうしてどの証拠資料を選んだのか、それをどのように解釈・推論したかという考えの道筋を示すものを表します。

今回の模範解答で言えば、以下のように「主張・根拠・理由」に分けられます。

読者の意表を突く効果がある。(主張)なぜなら、「一 榎木の実」には、失敗した兄弟が、お爺さんのおかげで成功する場面が書かれているため、(根拠)「二釣の話」も同じような展開になると予想して読み進める読者が多いと思うからだ(理由)。

主張は、客観的な事実やデータが提示されないと、ひとりよがりな意見として、みなが納得してくれません。また、客観的な事実やデータだけでも不十分で、「事実やデータがあるから」では、読み手・聞き手は理解することが難しく、納得してくれないかもしれません。客観的な根拠とそれを解釈した理由づけが整った上で強固な主張になると言えます。国語科の授業で自分の意見を書かせても、主張は書いてあるが、根拠や理由が乏しく、また、根拠と理由がごちゃまぜになっていて、説得力の欠ける文章をよく見かけます。日頃の授業の中で生徒で、「根拠・理由・主張の3点セット」をしっかりと分けて書かせる練習を積み重ねていくことが大切であるし、そのような地道な努力が、今回の全学調のような問題を解ける生徒が増えていくことにつながるのではないかと思います。

周防大島中学校全体の結果については、2 ページ目の領域別平均正答率をご覧ください。※理科については、タブレットを用いた新傾向の問題のため、分析シートの表示がありません。周防大島中学校の国語については、「読むこと」「言葉の特徴や使い方に関する事項」については、県平均と有意差は見られません。しかし、「話すこと・聞くこと」「書くこと」については、県平均より下回っています。「聞くこと」については、どの学年についても、学校生活の中の授業中だけでなく、様々な場面で人の話を聞けない生徒が多いことは実感されているのではないかと思います。これだけ見ても、大切な情報をしっかりと聞き取った上で理解するという力を身に付けさせることが肝要だと思います。全学調の結果を分析することで、自らの授業の改善に生かせそうなヒントが見つかるかもしれません。全学調だけでなく、県確認問題の結果についても共有フォルダにありますので、ぜひ一読して、授業づくりの参考にしてみてください。

参考文献

鶴田清司・河野順子編著『論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン中学校編』明治図書 2014 年